

### 三 ふるさと笠岡を詠んだ比庵の歌

#### (1) 笠岡に疎開の時期 (昭和二十年一月〜終戦)

##### ①長歌 疎開風景

孫たちを疎開せしむと ひきつれてその父と共に ながねふく吉備の中国 遠けれどふるさとさして  
岡山に急行汽車を 乗り換えて小夜ふかければ 駅員の室に休らひ 久しくも待ちしと思へ  
はや汽車の入りしと言ふに あわてつゝその父を先に 重き荷を背負ひ持ち 幼きを引立て  
われも△やうやく走りゆきしが その父の姿も見えず 心せき汽車には乗りし 発車してそこにあやしみ  
傍らの人より聞きて乗り違ひせしと思へど この汽車は上り急行姫路まで止まらぬものを

二た時も走りつゞくを あなやとて驚きさわぎ 人らまたのゝしり言へば はらわたのよじるゝばかり  
悔やめどもせんすべしらに 恨めども寄るべもあらず 幼きが泣くを賺かして 菓子をやり脇に抱きて  
何時しかも寝入りしものを 覚めぬ間にはやもはやもと 既にして明け行く窓に 孫たちの駅ひとつひとつ

##### ③幼き孫 疎開せしむと ひきつれて 終りにかへり ふるさとへわれは

##### ④いさきとり 海辺の岡の 冬の日の 輝く下にて 海を見るわれは

##### ⑤笠岡の 岡より見れば 神島や 沖の八十島 四国まで見ゆ

##### ⑥長歌 孫の罹災 (岡山市に下宿していた孫固が六月二十九日に罹災)

二十九日の大空襲 わが孫はいかにせしや 無事ならばはやも帰らむ いくたびか罹災者列車  
着きたれど孫は帰らず 気の利かぬ兒にこそあれば 逃げ場をや失ひたるや 運の好き兒てもあれば  
何かして逃げ抜けゝむか その母のところへゆきて あれこれと想ひ語れど 二人して語るに堪えず  
わが室にひとり来りて 同じことくりかへすなべ ひとりにも堪えず

##### 反歌

翌日のひるすぎに孫は みだしたるさまにもあらずて帰り来たれり

四方火に囲まれければ 下水溝にとびこみて その水をかぶり居たりと

##### ⑦長歌 母の釜

疎開荷の中よりいでし 小さなさびし古窯 たらちねの母が一人居 城山の松の下びの海近きところにあ  
りて 朝夕に炊きたうべし その母の死にたる年に われははや老いぬるものを ふたゝびも母のふるさと  
いくさをば逃げ来りて その釜に飯炊きたべむ 米は足らねど

##### 反歌

母の釜は米は足らねど その母を思ひらひに食うべ足らしめ ときどきに帰り来りてうま魚たうべ足らひし  
母の釜の飯

##### ⑧吉田村平木にて (笠岡から更に吉田村平木の岡の上にある離れ屋に再疎開、電気設備無し 昭和二十年七月)

・ ともし火の 下に親しむ 時にして ともし火の無き 室に居りかねつ  
・ 山里は 夏も涼しと おもひきや あつさも暑し 住めばあはれに  
・ 小山村を 平木の里の 家路には ほたるちらちら 星空に飛ぶ  
・ きりぎりす 鳴くや片山 細道を 通ひ馴れるも 馴るゝ住居か

## (2) 終戦後の混乱期

(昭和二十年～二十二年 吉田村から笠岡に二十年十一月転居)

### ① 日本降伏

・ 昼暑く 裸にならで 堪へがたし 國は敗れて 人いきてあり  
・ 三千年の 歴史空しく 降伏の 國に生きつゝ 秋立ちにけり

### ② 長歌 贈 石川暮人君 (息子が戦死した友人に贈る)

焼跡にい立ちいまして國の仇 民の怨みをはらすべき 時到れりと  
いとし子を出で征かしまし 君が歌よめばわが胸断ち焚く如し

### ③ 長歌 民飢ゑむとす

國敗れ民飢ゑむとも まつりごとかしこみまおす もろもろの大臣  
つかさだちいそぎてはやく はかりごとそこに立ておき 此の民を  
救はざりせば 何をもて大御心を行ひまつらむ

### ④ 長歌 上 玉堂先生 (吉田村での唯一の楽しみは玉堂との書簡交換)

畫のひじり玉堂先生 畫のいとま歌よみ楽しみ よむ歌をわれに示され  
その歌に畫をさへ添へて めづらしく麗しければ 山住みの語る人なく  
村住みの行く処無み つれづれとあらくも知らに 先生の文待ち受けて  
披き読み眺め耽れば 多摩川の臺(うてな)の上に 取り上げし魚は食はね  
泡立てる麦酒は飲まね われも楽しゑ

### ⑤ 川合玉堂への書簡の一部 (昭和二十年九月二十日)

何もかも失へる日本に藝術は彼等も奪ふこと能はず、敗戦の墮落より我國家を救ふものは実に  
藝術の使命と存候。彼等をして尚帝国の前に頭を下げしむるものありとせば、先生の藝術の如き  
ものを措いては他に求むべからず、先生は実に國の威厳を代表せらるべきかと存じ候。

### ⑥ 長歌 大晦日と新年 (吉田村から笠岡に帰居)

十日ばかり冬至を過ぎて 日の長くなりしと思ふ大晦日かも ほのぼのと御空は匂ひ  
暮れゆくやこの災ひの年の終りは ゆく年はこの年とても惜しまむれ  
ふたたび来よと願はざれども

### ⑦ 城山を 少し掛けたる 初空のほのぼの明けて 硝子戸に見ゆ

### ⑧ 見渡せば 四方のさくらの 咲き始めて 敗れし春も おろそかならず

### ⑨ 高島や 沖の白石 雨晴れて 北木の島に 霧立ちのぼる

### (3) 東京駒込時代 (昭和二十三年以降)

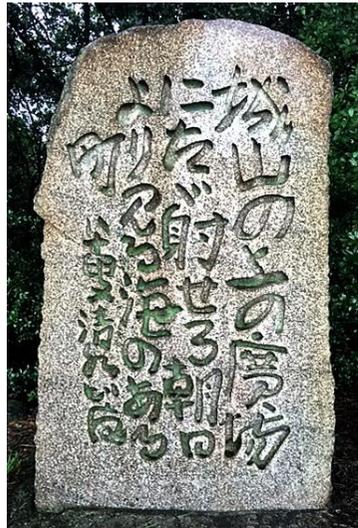
昭和二十三年以降は東京駒込に本拠を置き、笠岡居住(神の島に別宅)の妹岡本章子の生存中(昭和四十年死去)は夏季数か月、没後は任意に笠岡を訪れていた。笠岡を詠んだ歌の中では大好きだった古城山公園(通称城山)と神の島の歌が多い。

#### ①城山

- ・わが里の 古城やまの 夏萩は こぼれて咲きぬ 松の木の間に
- ・城やまの 夏の萩はや さきてあり わが友もまた それをいひけり
- ・山に居る 黄蝶がひとつ くぐり飛ぶ 松の下への 朝のみどりを
- ・城山の 九月の朝を 一茎の 露草の花 手折りていはむ
- ・城山の 東の側のなだら畑 けしきよろしく さゞげ花咲く
- ・城山の 東細道 うねりつゝ 海より立てる 霧に漂ふ
- ・城山ゆ 見下す海を 群れつゝも 光りて低く わたる鳥あり
- ・城山の さくらの下に ひらけたる 海はまさおき 空の色なり
- ・城山の みちの雑草 うつくしく 秋に揃ひて 蓼の花も露草も
- ・城山に ひとり上りて 秋風の 松の木の間の 海を見わたす
- ・城やまの 松の下海 ゆるゆると 舟こぎゆける 海人をとめかも
- ・老松の 下に来れば 腰下し 一休みする ことゝするかも
- ・城山の 老松が根に 腰かけて しばらく休み 立上るなり
- ・老松の 大木が横に さへぎれる 波平らけき 海のがめなり
- ・夜ふりし 雨の洗へる 城山の 松の下路 朝たにのぼる
- ・城山の 孤つ老猿 さびしさに 泣くことさへも 知らぬやうなり
- ・山の上の 一つ老松 誰を待つ 年々に来て われは見にけり (画賛 左上)
- ・城山の 上の広場に たゞ射せる 朝日より見る 海のある町 (古城山歌碑 左下)



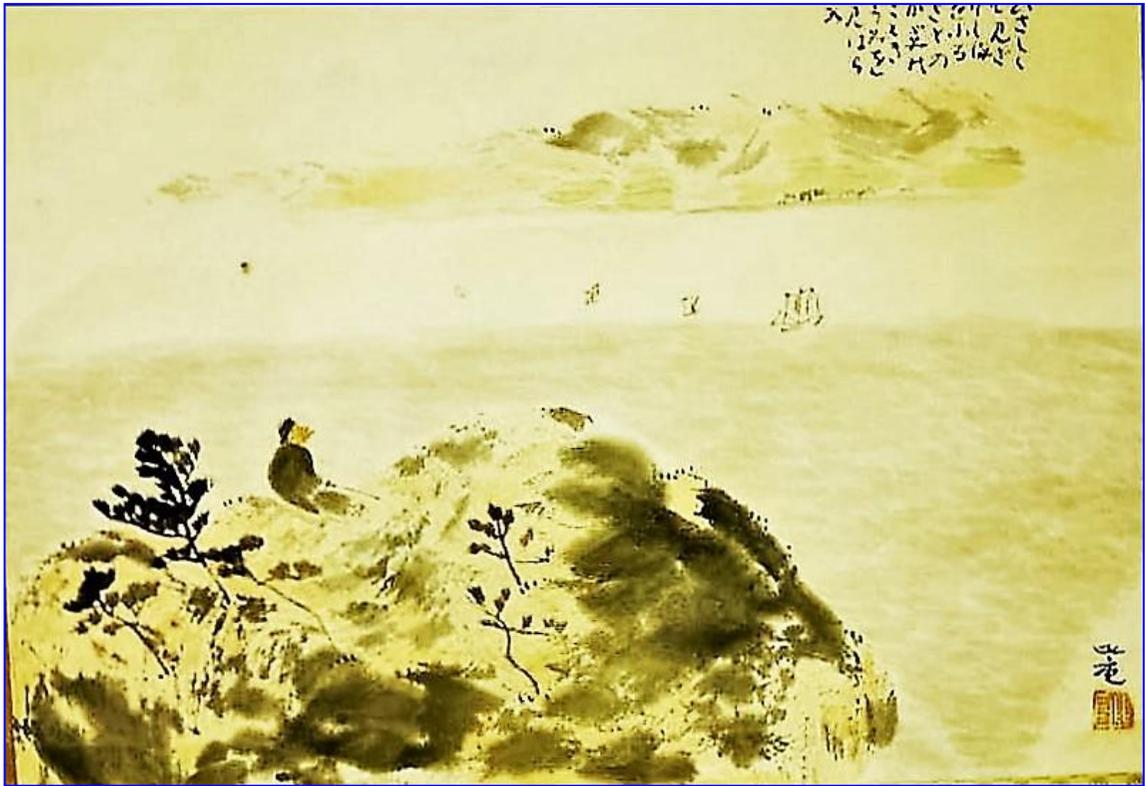
山の上の 一つ老松 誰をまつ 年々に来てわれは見にけり  
比庵九十三



城山の 上の広場に たゞ射せる 朝日より見る 海のある町  
八十叟清水比庵

・ひさしくも 見ざりし海を ふるさとの かぢみのごとき 海を見はらす (画賛 ①)

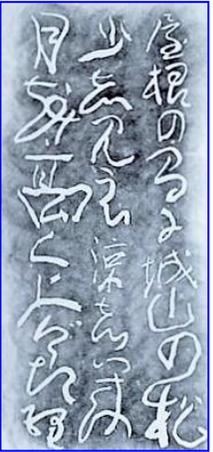
・屋根の間に 城山の松 少し見え 涼しき月を 高く上たり (威徳寺歌碑 ②)



ひさしくも 見ざりし海を ふるさとの  
かぢみのごとき 海を見はらす 比庵

①

この画は比庵がふるさと笠岡特に城山を愛したことを示す  
作品として清水家から笠岡市に寄贈し、市会議長室に額装  
して掲載されている



威徳寺歌碑窓日創刊五〇周年記念  
昭和五十四年  
屋根の間に 城山の松 少し見え  
涼しき月を 高く上たり

## ②神の島

- ・朝夕は 寒きほどなる 島に来て 昼の暑さを 堪へがてに居る
- ・神の島 夏の盛りの 家近く はたおり鳴きて 海しずかなり
- ・神の島 寺間の磯の 昼たけて 一つ鳴く虫 ひとりきくかも
- ・神の島 寺間の磯ゆ 見はるかす 天ひろびると 夕焼けて海に
- ・神の島 海平けく 秋暮るゝ むかうに灯る 笠岡の町
- ・神の島 寺間の浦の 石路は いたるところに 咲きて冬なり
- ・去年粟を 植ゑしはたけに 今年また 粟を植ゑたる島に來りつ
- ・垣の外 ながれてほそく 山水の おとのさやけく 秋の海に入る
- ・雲垂れて 山際ばかり 金色に 燃ゆる方より 風強く吹く
- ・いにしゑの 神の島べを 舟こげば 海の中にて 蝶一つ飛ぶ (画賛 左上)

### ・長歌 島の女

山畑の草をとりつゝたかだかど 隣の畑と語り合う島の女の平けきその日その日の  
安らけき彼家此家のさまさまの よしなしごとの美しき声のまにまに山鳩は松の林に  
頬白は森のこずゑにさへずり交す 比庵 (昭和二十七年 七十歳) (画賛 左下)

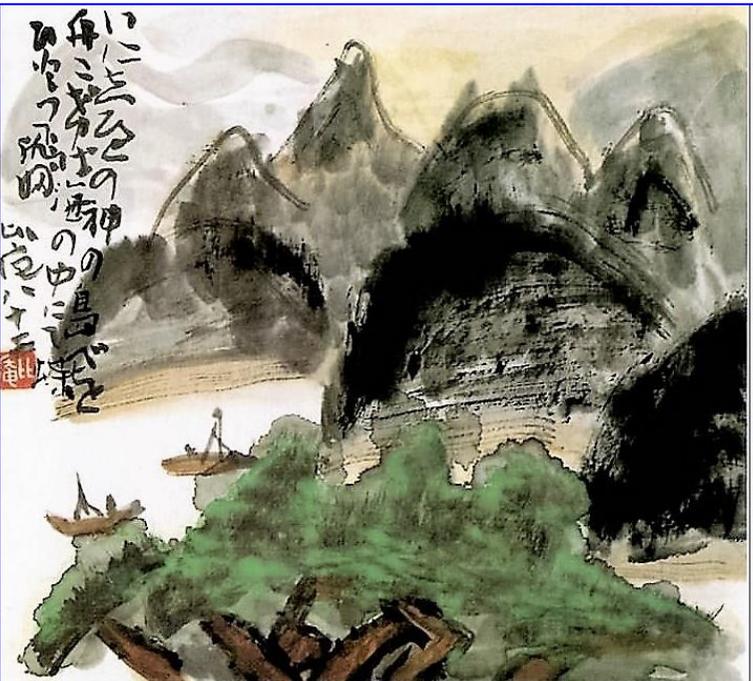
### 島の女

山畑の草越登里つゝたふたふと 隣里の畑とかたりあふ  
島の女の平けき その日その日の安らけき 彼家此家のさまさま  
よしな志ごとの美しき起 聲のまにまに山鳩者 松の林に頬白者  
森のこずゑにさへずりかはす 比庵

### 神の島

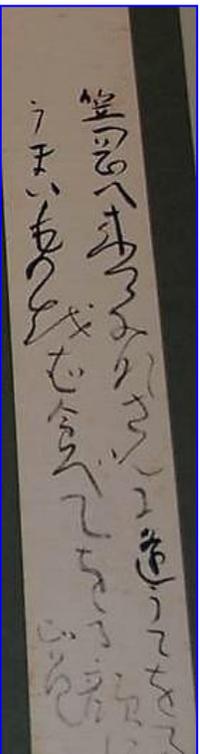
いにしゑの 神の島べを 舟こげば

海の中にて 蝶ひとつ飛ぶ 比庵八十二

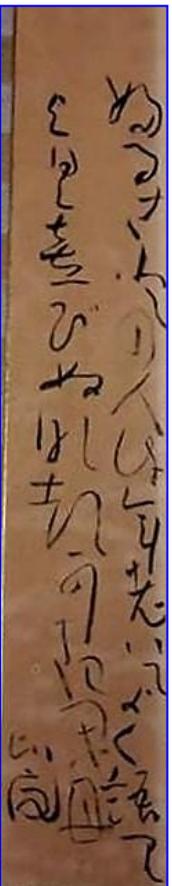


### ③その他

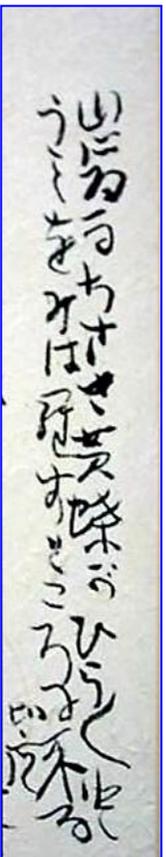
- ・笠岡の 松山肌を 赤く染め 海よりさせる 夕日も秋に
- ・ふるさとの 瀬戸の海の 大桜鯛 たべてるばかりて われはあるかも
- ・古里の 笠岡にゐて 君にあひぬ 歌碑を見てもらひ 無花果もたべてもらふ
- ・大君の 笠岡の山の いたゞきの 松に寄り咲く 萩の花かも
- ・父母の 墓にまゐれば 冬ながら あたゝかにして 海も見ゆるに
- ・笠岡に 来てみなさんに 逢うてをる うまいものをば 食べてをる顔に (短冊)



- ・ふるさとの 人は年老いて よく語り よく喜びぬ なつかしきかも (短冊)



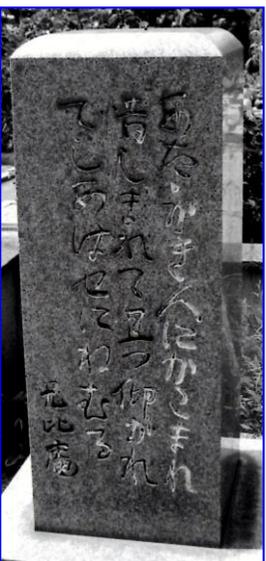
- ・山にゐる ちさき黄蝶が ひらひらと うみをみはらす ところに来る (短冊)



### ・墓碑 (威徳寺)

まどかなる 夢をむすぶと いふことの いかにまどけき ものにあるかも (比庵夫妻墓碑)  
あたゝかき 人にかこまれ 惜しまれて 且つ仰がれて しあはせにねむる (妹章子の墓碑)

比庵夫妻墓碑



妹章子墓碑

### ・歌碑 (中央図書館)

柳はみどり 花はくれなゐ 食べ物是天ぷら糸づくりは酒はのまねど 八十八叟比庵

